

氏名	平田 誠一郎
学位の専攻分野の名称	博士(社会学)
学位記番号	甲社第50号(文部科学省への報告番号甲第458号)
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2013年3月1日
学位論文題目	社会的行為としての指揮 —音楽演奏における時空間の編成から—
論文審査委員	(主査) 教授 宮原 浩二郎 (副査) 教授 阿部 潔 小川 博司(関西大学教授)

論文内容の要旨

平田誠一郎氏の申請論文は、クラシック音楽の演奏において「指揮者は何を行っているのか」を、社会的な理論研究と実態調査を通して明らかにしようとする試みである。本論文によれば、指揮者はたんなる音楽的・技術的な指導をこえて、奏者・聴衆を含む演奏空間にいる人びとの「内的時間」をコーディネートするという、独特の社会的行為の担い手である。ここで「内的時間」というのは、物理的に計測可能な「外的時間」とは異なる、人びとが音楽に接するなかで感じている「意識の流れ」を指している。指揮者は多様な奏者の現状認識を媒介とした相互的リーダーシップを通して、共有された「内的時間」を身体化して具現するのである。こうした指揮者の活動の具体的内実、演奏空間の在りようによって異なる様相を見せる。クラシック音楽の演奏空間は近代社会から現代社会にいたって大きく変容してきたが、それにともない現代では、指揮芸術の確立を目指した近代の「巨匠」指揮者とは異なる、新たな多様な指揮者像が模索されている。高級芸術の精神的価値を一身に集める垂直的・権威的な指揮者像から、音響の純粹性や技術的洗練あるいは一般聴衆や地域社会との交流を重視するような水平的・脱権威的な指揮者像への変容である。本論文は、クラシック音楽の指揮者にとって本質的な社会性の契機を理論的かつ経験的に考察・解明し、その歴史的変容に着目しつつ、現代社会における新たな指揮者像を展望している。

以下、本論文の構成に沿いながら、要約してみよう。まず、第1章「音楽の時空間を統べる者としての指揮者」において、本論文の目的・意義・研究視角が述べられ、「指揮者は何をしているのか」という問いとともに、それが演奏に接する人びとの内的時間のコーディネートを核とした音楽演奏の時空間の統合であるという基本命題が提示される。その後、第1部「指揮者に関する理論的考察」と第2部「指揮者と演奏空間の現代の変容」の二部構成で議論が進められる。

第1部第2章「近代的指揮者の成立と変容」では、指揮者の歴史をその起源から近代的指揮者の誕生、指揮芸術の確立にともなう巨匠の時代とメディアテクノロジーを活用した大指揮者の時代、そして現代における演奏空間の変容と指揮者の多様化にいたる経緯が、音楽史や文化史の文献資料をもとに概観され、本論文の背景となる歴史的・社会的文脈が確保される。続く第3章「社会学的指揮者論の系譜と課題」では、本論文に関連する多様な「先行研究」の発掘・整理・批判の作業を通して、本論文にとって有益な視点を見出していく。とくに組織リーダーシップ論における指揮者の研究、A. シュッツの現象学的音楽論、Th. W. アドルノの音楽社会学、さらにはクラシック音楽に関する近年の歴史社会学や文化社会学の研究成果が検討され

ていくが、その過程で、「音楽の享受」に固有の過程に焦点をあわせた理論としてシュッツとアドルノの重要性が確認される。そこで、第4章「指揮者と音楽の共同創造過程」では、あらためてシュッツの音楽論を取りあげ、おもに時間論的観点から指揮者の活動が論じられる。ここでは、筆者自身によるオーケストラ・リハーサルの参与観察や指揮者への聞き取り調査の知見を交えながら、音楽に特有の相互行為としての内的時間のコーディネートの在りようが掘り下げて考察される。指揮者は奏者の現状認識を媒介とした相互的なリーダーシップを通してアンサンブルにおける協調を作り出し、共有された内的時間を身体化して具現するのである。第5章「Th. W. アドルノの指揮者論」ではアドルノの音楽社会学がその指揮者論を中心に引き上げられる。ここでは主に空間論的観点から指揮者の活動が論じられる。とくに、音楽芸術の職業的指揮者による身体的具現がその文化的・社会的権威の醸成につながり、また、音楽の規格化（パターン化）を助長するという批判が検討されると同時に、現代におけるクラシック音楽の教養文化としての衰退に照らして、アドルノ的な批判を再考する必要性が指摘されている。

第2部「指揮者と演奏空間の現代の変容」は、第1部における理論的考察を踏まえた事例研究編となっている。近代の演奏空間はクラシック音楽の権威の変容とともに新たな様相を呈するようになるが、第2部ではそうした変容に現代の指揮者たちの活動がどのように応えてゆくのか、音楽雑誌記事の内容分析や演奏活動のフィールド調査を踏まえた考察が展開されていく。

第6章「音楽批評における指揮者イメージの構造と変容」では、音楽雑誌のコンサート批評における指揮者への言及を資料として、演奏空間を構成する指揮者のイメージが分析される。音楽批評における典型的な指揮者像に「天才的個人」があるが、その実質的焦点は時代が下がるにつれて「内面性の強調」から「音楽の技術」へと移っていることが明らかにされ、従来の近代的指揮者像の問い直しの必要性が示される。続く第7章「指揮者のドラマトゥルギー」では、ドイツの現代音楽家 M. カーゲルの（指揮者が演奏途中に倒れるという）音楽劇『フィナーレ』のフレーム分析を通じて、内的時間のコーディネートという指揮者の役割と演奏空間における従来からの指揮者のイメージの間にある距離が描き出されるとともに、演奏と演技という多元的リアリティの問題が浮き彫りにされ、あらためて「楽器をもたない音楽家」である指揮者の、舞台上の振る舞いの意味が問い直される。最後に、第8章「指揮者と音楽の公共性」では、クラシック音楽の権威の変容にともなう指揮者像の変遷との関連で、現代の指揮者たちによる音楽イヴェントやアウトリーチ活動の試みがいずれも取り上げられる。大阪・御堂筋の「大阪クラシック」や東京・有楽町の「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン」といった新たな音楽イヴェントのフィールド調査をもとに、現代日本においては西欧近代の市民的公共圏における音楽文化よりもより平等主義的な関係性のなかでの音楽の共有が目指されていることが指摘され、こうした方向に現代のクラシック音楽指揮者の可能性があることが示唆されている。

論文審査結果の要旨

（本論文の意義）

本論文は、指揮者の社会学的考察という、これまでほとんど手をつけられてこなかった分野において新たな研究視座を構築した点に着実な学術的意義をもっている。筆者は本研究において、その展開の直接の踏み台となる具体的先行研究を欠いていたため、あらためて人文社会科学の全体を見渡し、広い意味での「先行研究」の発掘・再発見を試みる必要に迫られた。そのことがかえって第1部理論編における文献レビュー作業を、それ自体オリジナルで生産的な業績として結実させている。本論文は、これまで様々な研究分野で個別・孤立的に言及されてきた指揮者論に対して一つの明確な見取り図を提示した点で、今後の指揮者の社会学的考察にとっての確かな道標の一つを提供している。

本論文はまた、指揮行為のもつ社会性を芸術内在的に考察する点でパイオニア的な意義をもっている。近

年の人文社会科学においてクラシック音楽の指揮が研究対象として取りあげられる場合、美学においてはその社会性が捨象される一方、社会学においてはその芸術性が捨象される傾向が強い。こうした現状にあって、本論文が「音楽すること」「音楽を享受すること」それ自体の価値を尊重しながら、なおかつ、そこに内在する社会性の契機を掘り下げて考察している点に注目したい。いいかえれば、本論文は、「芸術と受け取られていること」の社会性だけでなく、「芸術すること」それ自体の社会性に焦点をあわせつつ、「指揮者は何を行っているのか」を考察している。こうした研究姿勢は本論文の展開に大きく貢献した筆者自身による実態調査の在りように肯定的な影響を及ぼしている。数名の現役指揮者への丁寧な聞き取り調査、オーケストラ・リハーサルの丹念なフィールド調査、音楽批評における指揮者像の詳細な内容分析、各種音楽イベントへの共感的な参与観察など、いずれの調査研究場面においても、筆者は指揮者の社会性を芸術内在的に感受し、生き生きとした具体的知見を引き出しつつ、論文中に記述・定着させることに成功している。その背景には、著者自身のグリークラブ指揮者としての長年の音楽経験が生かされていることも付記したい。もちろん、こうした芸術内在的な研究姿勢は、「芸術」と「社会」を対比的・対立的にみなす傾向の強い社会学研究において緊張を招くものだが、本研究はそれを何とか維持し、社会学と美学の融合に向かう生産的な道筋を切り拓いている点に独自の学術的意義を認めることができる。

さらに、本論文の第7章「指揮者のドラマトゥルギー」がそれ自体きわめて独創的な、完成度の高い、卓越した論稿として結実していることも指摘しておきたい。この論稿は指揮者を主題化したM. カーゲルの現代音楽を取り上げ、E. ゴフマンのフレーム分析を応用しながら、コンサート会場における「作品の次元」「プレイの次元」「イベントの次元」というリアリティの多元性とそのダイナミズムを明快に析出し、「演奏」と「演技」の輻輳性・緊張性の問題を見事に照射している。それは特異な音楽作品のみならず舞台芸術一般の社会学的分析にとっても範例的な意義をもつと同時に、筆者の社会学者としての学術的ポテンシャルの高さを示すものである。本章の初出は学術誌『ソシオロジ』への掲載論文であるが、本申請論文に収められるにあたっては第2部のバックボーンをなすものとして大幅な改訂が加えられ、議論展開・文章表現ともに完成度を一層高めている点も評価したい。

以上指摘したように、本論文は博士学位申請論文に求められる学術的水準を十分に満たしていると判断する。

(本論文の課題)

いうまでもなく、本論文には今後さらに検討されるべき課題もいくつか残されている。ここでは筆者がさらなる研究の展開に向けて取り組むべき課題を、以下の三点にわたって指摘しておきたい。

第1に、音楽の演奏空間および指揮芸術に関する理論的考察において、さらなる論理的明確化と踏み込んだ概念的整理が行われることが期待される。本論文はシュッツとアドルノという哲学的社会学から正しく養分を得てはいるものの、これら古典理論との「知的格闘」がより徹底した形で継続されていくことが望ましい。シュッツの場合、本論文のキー概念である「内的時間の共有」をもう一つの重要概念である mutual tuning-in relationship とともに交叉させて、より明快かつダイナミックに再定義していく余地が残されている。アドルノの場合、その音楽美学の核心としてクラシック音楽に固有の（「演奏」から自律した）「作品」自体への批判的省察を避けて通ることはできないが、それが現代の演奏空間および指揮芸術にとってどのような意義をもつのか、筆者なりの視点から掘り下げて追究すべき課題が残されている。

第2に、本論文の主要命題の一つをなす、近代から現代へといたる音楽の演奏空間および指揮者の在りかたの変容に関して、そうした変容をもたらした社会的要因の探究がやや手薄であるとの印象をうける。とりわけ20世紀における複製技術の発達と普及は、クラシック音楽の創造、演奏、鑑賞（生産、流通、消費）

のすべての側面に大きな変化をもたらし、それが指揮芸術の在りようにも及んだことは容易に想像がつく。本論文が示した垂直的・権威的な指揮者像から水平的・脱権威的な指揮者像への変容の背景として、音楽芸術における複製技術（さらに情報化・IT化）のインパクトについて今後より明確な考察が展開される必要があるのではないかとと思われる。

第3に、本論文は、現代的な水平的・脱権威的な指揮者像への変容を肯定的に評価しつつ、大阪・御堂筋の「大阪クラシック」や東京・有楽町の「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン」といった一般市民へのアウトリーチ活動や音楽イベントのうちに、音楽芸術における新たな「公共性」の可能性を見出している。現代的指揮者たちが新たな「ポストブルジョア公共圏」（この表現は本論文では使われていないが）の生成に関与しているとの指摘は新鮮かつ魅力的ではあるが、そのための実態調査は必ずしも十分とはいえない。また、「権威」や「公共性」といった基本概念に対する精査も必ずしも徹底されていない印象をうける。一口に「権威」といっても「社会的権威」と「文化的権威」の違いに留意する必要がある、「公共性」もまたハーバマス、アーレントをはじめ近年の多様な概念化の布置連関に十分留意していく必要があるだろう。今後のさらなる実態調査の進展とともに、こうした基本概念の肉付け作業をも同時に試みていくことが期待される。

審査委員会は、本学位請求論文の内容と申請者の研究活動を慎重に審議し、2013年2月22日の公開口頭審査の結果から判断し、平田誠一郎氏は博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいとの結論を得た。ここに報告する。